

## 屋根飾り

屋根瓦(標本番号H165890、高さ/35cm 幅/43cm 奥行/35cm)

吉本 忍 (よしもとしのぶ)

本館民族文化研究部

一九七〇年六月、はじめての海外調査をインドネシアでおこなうべく、わたしはジャワ海の上空を首都ジャカルタに向かっていた。徐々に高度を下げてきた飛行機が海岸線を越えたとたんに、それまで緑一色であった陸地のところどころに、赤い色がちりばめられたように見えはじめた。それは燦々と降りそそぐ日差しのおかげで、ヤシの木立と民家の屋根瓦が織りなす、赤道直下の国ならではの色模様であった。その光景は、わたしがはじめて目にしたインドネシアの第一印象として、今も鮮明に記憶されている。

当時、ジャワ島の田舎では、屋根の多くがヤシの葉や草で葺かれていたが、赤い素焼きの瓦葺きの屋根が増えつつあった。この屋根飾りは、そうした瓦葺きの屋根の棟瓦として使われていたもので、首を横向きに

して胸をそらせたアヒルの土偶がリアルに表現されている。

一九八八年にわたしがバリ島で、この屋根飾りを収集したさいの記録によると、製作用地と使用地は、ジャワ島北岸の古い港町テガルの南方一五キロほどのところにあるジャワ人の村(ケドウンバンテン)で、製作時期は一九四〇年代(推定)となっている。

このような屋根飾りは、素焼きの屋根瓦が各地で手作りされていた時代に、左右一対のものとして作られていた。そうしたことから、このアヒルの土偶も一対のものとして作られたはずであり、屋根に飾られていたときには、二羽が屋根の上で向き合うように

して胸をそらせていたと見られる。工場で大産生産される釉薬をかけて焼成された屋根瓦が主流となった現在、このような屋根飾りはもはや作られておらず、むしろかしくなっている。

